愛される紙面を地域とともに。

「広報なかだ」
～広報なかだ編集委員会～ 事例10

地域の声を反映するために地域から選ばれた編集委員体制を

地域の編集委員が一緒になって地域に役立つ多彩な紙面づくり。

「地域の方といろいろ交流を持っている中で、『編集委員にならない？』と声がけがあったんです。今では学校のサークルのように楽しく紙面づくりをしています」と語る広報なかだの編集委員の皆さん。編集会議の雰囲気も明るく、一緒に作っていく楽しさを感じているようです。

昭和46年から発行を続けてきた歴史のある「広報なかだ」。以前は市民センターの職員と公民館運営協力委員会が協力して発行していましたが、地域の広報紙として、もう一歩地域の中に踏み込んでいこうということで6名の地域住民からなる編集委員体制になりました。

「地域の人に役立つ地域に根ざした広報にしたい。地域の声をもっと紙面に反映させるため、私たちの責任も重大です。」

地域の動きにアンテナを張り様々な地域情報を住民に発信。

以前、編集委員の間で、もう少しくだけたトレンド情報紙のようにしようという話が出ました。しかし、「地域の話題を伝えることで地域に目を向けてもらうことが大切。地域の情報をしっかり発信していこう」と方向性を再確認した経緯がありました。

あくまで地域に根ざした広報紙。例えば、「人物往来」というコーナーで、地域の学校や交番に勤務する方の異動情報を掲載したり、地域の学校のブラスバンドの話題や、スポーツ行事の結果を扱ったり細やかな取材で地域情報を掲載しています。

「新しく中田に来た方に地域を知ってもらうため町内会の紹介のコーナーも設けました。普通では話もできないような人に取材に行ける楽しさもあります。」

毎年恒例の行事を取り上げる際も、視点を変えて記事を書いています。知っているようで知らなかった地域の情報も多いようで、読者からは「面白かった」「読み応えある」という声も届いています。紙面を通して地域の人々とコミュニケーションもとれているようです。

地域との連携を密にする地域に根ざした広報紙づくり

地域の方や地元企業も協力。地域とともに運営しているという実感。

「地域にはいろんな活動をされている経験豊富な方や、いろんな才能のある方がいます。そういった方々の知恵をお借りして紙面づくりを行っています。」

編集委員の中にも元PTAや連合町内会など地域の各種団体で活躍している方がいます。日頃の経験をもとに、自分の得意分野を中心に記事を書いています。「我が家のおいしいレシピ」というコーナーは編集委員ではない料理好きな連合町内会の婦人部の方が書くなど、地域の方も積極的に参加してくれています。

また、「印刷屋さんに地域の情報紙であると理解していただき、価格の面でご協力いただいております。」

こんな工夫もしています！

地域活動の中から人材を発掘

地域の活動をされている方のネットワークの中から編集委員を探しています。PTAの行事に連合町内会の婦人部が参加したり、市民センターの講座の運営委員を地域の各種団体の方に手伝ってもらうなど交流をしている中から声がけをしています。

編集ボランティアが続くのは一緒に作ることが楽しいからこそ。

幅広い年齢層の編集委員が違った視点からお互いに意見を出し合い、広報を作っています。「先輩たちのおかげでいろんなことを勉強させてもらっています。」

常に明るく元気な編集会議。集まって談笑している中から次の記事のアイデアが出てくることもあります。

「『あそこに音楽スタジオができたんだって』『誰が始めたの？』という雑談から『記事にしたら音楽好きの子どもが使うんじゃない？』という話になったこともあります。」

「身近な話題を楽しく読んでもらうのは大変。でも、みんなでアイデアを出し合い、楽しくやっています。」

まちを愛し、ふれあいを楽しんでいるからこそできる地域の広報紙。今後も地域に関心の高い編集委員を集めていきたいと考えています。「こんな楽しいことは多くの人に経験して欲しいですね。」

事例のまとめ

- 幅広い年齢層の編集委員が活発な意見を出し合いながら、地域に関する様々な情報を掲載し、地域に役立つ、地域に根ざした広報紙を発行しています。

地域の祭りで町に元気を。

「フライハイおいで」「コミュニティまつり」

～生出地区～ 事例11

地元に根ざした凧揚げ大会で地域コミュニティが活性化する

地域に根ざしたイベントで地域が活性化していく。

全国的に有名になった凧揚げ大会「フライハイおいで」と秋の風物詩である「コミュニティまつり」の2つの大きな行事を実施している生出地区。生出市民センター運営協力委員会委員長の山田さんは、地域の祭りやイベントがいかに地域の活性化に貢献しているかを強調します。

「地域の活性化には、隣同士や地域のコミュニケーションが大切になります。このふれあいの場を作っていくうえで、こういった地域のイベントは大変有意義です。」

「フライハイおいで」は3月に、「コミュニティまつり」は10月に開催。「2つのイベントの準備で一年を通して忙しい日々が続きます。苦労も多いですがこのイベントのおかげで町は元気なんだと思います。」

伝統的な風習を地域密着のイベントとして活用。

「『フライハイおいで』は昔この地域にあった『するめ天旗』という凧を揚げる風習から始まりました。」

その後、話題を呼び全国から凧好きが集まる大きなイベントに発展。しかし、大会の規模が大きくなるにつれて地域色が薄くなるという面も出てきました。「地域の活性化という観点から、もう一度原点に戻って地域密着の運営に見直しました。」

地域密着のイベントとして個人的に参加する方も多く、さらに各町内会も大凧を製作。天に舞う大凧が大会を盛り上げています。「12帖もあり製作も大変。しかし、大凧づくりを通して、町内会にいい絆が生まれています。」

地域の小学校や福祉施設からも参加。卒業記念などに凧づくりを取り入れている学校もあります。福祉施設は普段あまり地域と関わることがないのでこのイベントが良い機会になっています。

イベントを通して強い絆づくり交流を育みながら地域の活性化に結びつける

もうひとつのイベント「コミュニティまつり」。しっかり顔の見える地域づくり。

生出地区のもう一つの地域イベントが「コミュニティまつり」。地域の絆づくりには欠かせないイベントです。「今年で30回目の開催。行事を重ねていくことで交流が生まれ、顔の見える関係も生まれています。」

毎年、歌あり、踊りありの楽しいお祭り。秋の風物詩として楽しみにしている人も多いと言います。地域の方の期待に応えられるようにと「コミュニティまつり」もいろいろ楽しい催しを考えています。

「子どもたちが参加できるような工夫もしており、親子で楽しめるイベントになっています。昨年から坪沼小学校の子どもたちが実際に農作業をして作った米や低農薬野菜を、自分たちの手で販売をしています。売り方も元気ですぐに売り切れてしまって大人たちも驚いています。自分で作ったものを実際に販売してみることは、子どもたちにとっても良い社会勉強になっていると思いますね。」

安全安心や子育てや防犯対策も地域の輪があってこそ。

イベントを通したつながりによって、地域の輪も広がっています。次世代に広がる地域の輪もその一つです。「小学生との交流として、幼児学級というものが生出小学校にあり、その支援を行っています。」

現在、学校だけでなく、家庭での教育・地域での教育の必要性が叫ばれています。生出地区ではそんな家庭・地域教育をテーマにした講座も予定しています。また、親の働く姿を見ていない子どもたちが、地域の方の活動を見学する社会勉強も行っています。

さらに、生出小・中学校、坪沼小学校の地域の子どもたちを地域で見守っていく「三校連絡協議会」も立ち上げています。地域に「まとまり」があると地域の「目」となり防犯効果を上げることができます。

「子育てにおいても防犯活動においても、人とのつながりが大切です。イベントをしっかりやっていきたいですね。」

こんな工夫もしています！

災害時の即戦力として中学生を育成

災害があったとき、地域一丸で対応できるよう地域のこれからを担う人材を育成しています。例えば、市民センター、婦人防火クラブ、学校、連合町内会が連携して、中学校で防災訓練を行う予定です。

事例のまとめ

- 地域密着のイベントを通じて地域の交流を図ることで、子育てや防犯対策など様々な活動につなげています。

挨拶から住民間の交流へ。

「マンションの自治会活動」

～ライオンズタワー仙台広瀬自治会～ 事例12

挨拶という日常の小さな取り組みから住民全体の共通課題を解決へ

マンション特有の問題解決のために、管理組合とは別に自治会を設立。

「管理組合はオーナーの組織なので、賃貸でお住まいの方は対象になりません。賃貸の方たちをカバーするためにも自治会を立ち上げました」と設立当時を振り返るライオンズタワー仙台広瀬管理組合法人理事長の佐藤さん。

全戸で404世帯、1,200名ほどの大規模マンションで、入居者は自動的に自治会や子ども会に登録となる仕組みにしています。

「防犯・防災、生活音や日常的なトラブルなどマンション特有の問題の対策をしていく必要があります。特にうちのように大規模なマンションの場合は、これらの問題を解決するためには日頃からの密なコミュニケーションが大切だと考えています。」

日頃の挨拶から始めた活動。顔見知りの輪を広げて問題解決。

自治会の取り組みとして最初に行ったのが「挨拶」です。「最初はとまどいがありましたが、続けていくうちに挨拶をするもんだという風になってきました。マンション特有の問題があっても、挨拶をするような関係であれば大きなトラブルにはなりません。顔見知りになることが円滑なマンションライフには必要です。」

「防犯も挨拶から始めることが重要だと思います。挨拶をしてとまどう時はこの人怪しいなとわかりますから。挨拶はお金のかからない防犯対策だと言えます。」

マンションも「終の棲家」になっていて住民間での交流は欠かせません。コミュニケーションを図る取り組みが必要です。

「現在は毎月イベントを行い、活発に住民間の交流を図っていますが、マンションだけでなく、ご近所にも参加の声がけをしています。」マンション建設の際に近隣で反対運動が起きたそうですが、今ではご近所の方もイベントを楽しみにしてくれるようになっています。

効率の良い運営で交流を図り防犯・防災につなげる

マンション挙げてのイベントが、防災時のシミュレーションになる。

「防災も住民の賛同を比較的得やすい取り組みと言えます。ただ、訓練だけですべてを行おうとするととても大変になります。防災と行事の取り組みを一緒に行うことで、効率性も高まっています。いろいろなイベントを通して、シミュレーションや人の配置等の訓練をしています。」

夏祭りやクリスマスなどのイベントでも防災シミュレーションを行っています。配食の列をどこに作るか、雨の日や暑い日にテントをどこにどういった張り方をするのか、冬場の暖房はどのくらい必要かなど、イベントを1回行うと分かるようになります。

「敬老会の行事では、交流という目的に加えて、お年寄りの健康状態の把握等を行っています。」

効率的な行事運営 負担を減らして参加を促す。

「活動を行ううえで心がけていることは、できるだけ手間暇を減らして効率よくやること。最初の夏祭りの時、とても手間がかかったため、手伝ってもらった方に『もう懲り懲りです』と言われたことがありました。」

定型化できる部分は定型化して手間を省くこと。行事などはある程度パターンを決めて、段取りよく進められるようにしています。櫓や出店は外注するなど、可能な限り負担を減らしています。

「参加の敷居を低くして、手伝ってもいいかなと思っている人を積極的に探すことが大切です。参加を増やすために、『当日ちょっとだけでもいいから手伝って』というように声がけしています。」

維持管理などで住民全員に関わる問題が多いマンション。なるべく負担を減らし、イベントなどを通して手伝ってくれる人の輪を広げておくことが大切です。

こんな工夫もしています！

イベントでは季節感を体感できる工夫を

最近日常の中であまり感じられなくなった「季節感」。仙台七夕やひな祭りやクリスマスなどの時期に、季節感を体感できるようにマンションのロビーを飾りつけています。

事例のまとめ

- マンション自治会を結成し、住民の交流を図るため、日頃の挨拶から活動を始め、行事と併せて防災シミュレーションを実施するなど効率の良い運営を行っています。